インドネシア東部・スンバ島のエスノヒストリー事始め

――口頭伝承と人類学の研究成果――

小　池　　誠

1　はじめに

1985 ～ 1988 年に筆者が社会人類学的調査[1)]を実施したスンバ島の中核村ウンガ（Parai Wunga，現在の行政単位で東ヌサ・トゥンガラ州東スンバ県ハハル郡ウンガ村）は，スンバで「最初の村」と呼ばれていた［小池 2005］。ウンガはスンバ人のマラプ（祖先，祖霊）が上陸したと伝えられるハハル岬が近くにあり，神話的な背景をもった地域として知られていた。筆者にとって神話と，研究によって明らかにされる歴史とは別物であった。ところが，2020 年に Google で検索していてたまたま見つけたインドネシア語の記事「スンバ人の話，東ヌサ・トゥンガラ州クパンから」（Kisah Warga Sumba, Kupang, NTT）」［anon. 2016］には，ランシング（S. Lansing）を中心とするチームが研究によって「ウンガ村が最初の村」だと明らかにしたと書かれていた。参照されている研究論文［Lansing et al. 2007］は，遺伝子と言語学の研究成果からウンガ周辺をオーストロネシア系言語を話す集団の上陸地点とみなし，スンバ人の祖先がそこからスンバ島各地に広がって行ったと結論付けていた。本稿の第一の目的は，このよ

キーワード：スンバ，オーストロネシア語族，移動史，神話，先史考古学

うな議論の妥当性を自分なりに明らかにすることである。社会人類学の枠のなかで得てきたデータと知識をはるかに超えて，先史考古学・分子人類学（molecular anthropology）・歴史言語学という筆者にとってまったく未知の研究領域に足を踏み入れた。これら3分野はまさに人類に関する学問であり，アメリカでは広義の人類学に含まれる（人類学は自然人類学と文化人類学に大別される）。

筆者は2021年度春学期に国内研修の機会を得て，「インドネシア・スンバ社会に関する人類学的研究成果の公刊」という課題に取り組んだ。これはスンバ社会の「家（house）」と歴史に関する，これまでの調査研究の成果をインドネシア語で執筆し，インドネシアにおいて単行本として出版することを目的としていた。このようなライフワークに取り組む上でも，スンバ人のエスノヒストリーの解明はとても重要である。これに関連する自然人類学（とくに分子人類学）と先史考古学，歴史言語学の最新の研究成果（その1つが *Islands of Order*［Lansing and Cox 2019］）を整理し，自分なりに理解することは筆者にとって避けて通れない課題であった[2)]。本稿はこのような研修期間中に取り組んでいた研究成果の一部を論文としてまとめたものである。

本稿はインドネシア東部に位置するスンバ島に焦点を当てた研究である。とはいえ，筆者が専門とする社会人類学（文化人類学の一研究分野）の研究成果と，遺伝子と言語を対象とする広義の人類学の最新の研究成果を組み合わせて議論を進めることは，インドネシアに限らず東南アジア島嶼部における人類の移動史と現在の地域社会のあり方を考えるためにとても重要な研究だと考えている。

以下に本稿の構成を簡単にまとめる。「2　スンバ人の文化と言語」は，3章以降の議論の前提となるスンバ島に関する基本的な背景をまとめたものである。「3　オーストロネシア人の移動史」では，先史考古学者ベルウッ

ド（P. Bellwood）の研究書を参照して，スンバ人が属するオーストロネシア語族という言語集団がどのように東南アジア島嶼部に広がっていったかを簡潔にまとめた。「4　スンバ人の移動史」は上記のランシングらの論文［Lansing et al. 2007］の内容を簡潔にまとめた上で，スンバの起源神話などを参照して，分子人類学と言語学に基づく結論を批判的に検討した。「5　考古学の研究成果と中核村ウンガの歴史」は，2010 年代以降，活発に進められたスンバ島の発掘調査の結果とウンガに関する口頭伝承を接合させて，議論をさらに進ませた。「6　おわりに」は，本論の要点を整理した上で，スンバの集落の変遷を 1 つの仮説として提示した。

2　スンバ人の文化と言語

2-1　スンバ島の概況

スンバ島はインドネシア東部を東西に広がる小スンダ列島の中の一つの島で，バリ島とティモール島のほぼ中間に位置する（地図 1 参照）。行政上，東ヌサ・トゥンガラ州（Provinsi Nusa Tenggara Timur）に属し，東スンバ県，中部スンバ県，西スンバ県，南西スンバ県という 4 つの県に分かれている。東スンバ県を除く 3 県はかつて西スンバ県を構成していたが，2007 年に 3 つの県に分割された。島全体の面積は約 11,000km^2（四国の約 5 分の 3）で，島全体の総人口（2022 年）はわずか 80 万人である。人口密度についてみると，島内で人口密度がもっとも低いのが東スンバ県の 36 人で，もっとも高いのが南西スンバ県の 213 人である［Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur 2023: 97-100］。

このような人口密度の低さはスンバ島の自然環境に起因している。島全体がサバナ気候に属し，インドネシアのなかでも乾燥した地域として知られている。とくに東スンバ県はオーストラリアから吹いてくる乾いたモンスーンの影響を受け，4 月から 9 月頃にかけての乾季はほとんど雨が降ら

地図1　小スンダ列島の島々[3)]

ず，非常に乾燥している。東スンバ県の北岸部は，まさにサバナ気候の典型で，丘陵地帯がうねり，木々が生えていない草原（サバナ）が一面に広がっている。乾季に飛行機から下を見ると，川沿いに樹木が茂っているだけで，まさに赤茶けた荒涼とした風景しか目に入ってこない。とはいえ，雨季に入ると，それが青々とした草原に変貌する。スンバ島の土壌はおもに石灰岩質のため農業には適さない地域が多い。東スンバ県において水田は一部にみられるだけで，生業の中心はトウモロコシや，イモ類，豆類の栽培である。いっぽう比較的雨量の多いスンバ島西部では水田耕作もひろく行われ，一部では果樹栽培もみられ，その結果，上述のように人口密度は西部のほうが高い。スンバ島全体で草原を利用した家畜飼養が盛んで，馬のほか水牛・牛・豚・鶏などの家畜が飼育されている。

「はじめに」で紹介した中核村ウンガは東スンバ県北岸部の最西端のハハル郡に位置し，神話に登場するハハル岬の南にある。中核村ウンガは山の中腹の森の中に位置し，木々に隠され，この村の存在を知らない者が麓近くに来ても家々を見つけることは難しい。耕地や川から離れていて，生活の場としてまったく適してなく，中核村での暮らしは大きな困難を伴う。毎日水汲みのため，ウンガの女性は乾期においては往復1時間以上もかけて泉に行かなければならない。村はかつてその周囲全体が石垣で囲まれていたが，今日石垣は所々崩れている。筆者が最初に調査した時は13棟の慣習家屋が建っていた［小池 2005: 59-61］。中核村ウンガは「おわりに」で紹介する砦化した集落の典型と言える。

農業の生産性が低く，東ヌサ・トゥンガラ州でも経済的に貧しいスンバ島はインドネシアの多数派であるジャワ人とはまったく異なる文化をもっていて，インドネシアでもユニークな文化が知られた地域となっている。スンバ人の特徴の一つがマラプ（*marapu*）に対する信仰である。国家公認の宗教（agama）であるイスラームやキリスト教に対して，スンバ人は

写真１　中核村ウンガの慣習家屋（1986 年筆者撮影）

スンバ独自の信仰をインドネシア語で「マラプ教（Agama Marapu）」と呼んでいる。マラプは多義的な言葉であるが，一般に「祖先，祖霊」の意味で用いられる。キリスト教に改宗するスンバ人が増加し，文化は急激に変化しているとはいえ，マラプに対する儀礼が執行される独特なとんがり屋根をもった慣習家屋「マラプの家（*uma marapu*）」と，家屋の前には建てられた支石墓（ドルメン），さらに具象的な模様が描かれた絣織物（イカット織り）は，今日でもスンバ島のあちこちで見ることができ，スンバらしさを構築する重要な要素として国内外の観光客を引きつけている［小池 2020］。

スンバ島に住むスンバ人（カンベラ語で *tau Humba*[4]）はスンバ島の圧倒的な多数派民族である。県単位，さらにその下の郡単位ですこし異なる文化[5]と言語が認められるが，スンバ島の東端のリンディ（Rindi）から

西端のコディ（Kodi）までスンバ人というアイデンティティは明確である。都市部に住んでいるスンバ人であっても，それぞれ出身の地をもち，そこにはそれぞれが属する父系氏族（カンベラ語で *kabihu*）の成員が住んでいる。島外へ移住するスンバ人はそれほど多くないが，仕事や進学などの理由で出ていく人もいるし，逆にスンバ島に入ってくる人々もいる。サブ（Sabu）島[6]からの移住者（サブ人）は植民地時代以前から東スンバの北岸部に定着し，東スンバ県の県庁所在地であるワインガプ（Waingapu）とウマルル郡の海岸部にはサブ集落（Kampung Sabu）と呼ばれる集落が点在している。サブ人はスンバ人よりも先にキリスト教化が進み，そのため一般的に教育水準が高く，公務員や学校教師に就く人が多い。さらに，ワインガプの商業地域に立ち並ぶ店舗の経営者はほぼすべて華人（Orang Cina）である。華人の商業活動についてはインドネシアの他の島々と同じである。2021 年に東スンバ県の住民の 87.0％がキリスト教徒（多数派はプロテスタント）で，ムスリムはわずか 6.3％である［Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur 2023: 114］。ムスリムのなかでは，フローレス島から来たエンデ人[7]（カンベラ語で *tau kawaii*）とスラウェシ島から来たブギス人[8]が歴史的に長くワインガプに定着していて，さらに近年になって仕事を求めて移入するジャワ人が増えている。

2-2　オーストロネシア語族のなかのスンバ語

スンバ人の言語に関してはいろいろな分類があるが，一般的に 7 言語（Kambera, Mamboru, Wanukaka, Anakalang, Weyewa, Laboya, Kodi）は多くの文献に共通に挙げられている［Lovestrand 2021］。これらの言語の総称として本稿ではスンバ語という表現を使用する。スンバ語はオーストロネシア語族に属し，現在のスンバ島にオーストロネシア語族に属さない言語を使用する土着の少数民族は存在しない。なお，高齢者の一部を除け

ば，今日スンバ人の多くはスンバ語だけでなく国語であるインドネシア語も日常会話で使用している。上記のカンベラ（Kambera）語は東スンバ県と隣接する中部スンバ県の一部という広い範囲で使われている言語を指している。カンベラは狭義には東スンバ県中部の一つの領域（domain）[9] を指し，オンフレー［Onvlee 1984］とカピタ［Kapita 1982］のカンベラ語辞書に掲載されている単語はこの領域の言語である [10]。東スンバ県と中部スンバ県の一部でほぼ郡単位で地域差が認められるが，相互に理解可能である。マンボロ（Mamboru）語とアナカラン（Anakalang）語は中部スンバ県，ウェイェワ（Weyewa）語の一部（Loli）とワノカカ（Wanukaka）語とランボヤ（Laboya）語は西スンバ県，ウェイェワ（Weyewa）語の一部（狭義の Weyewa）とコディ（Kodi）語は南西スンバ県で使用されている。Glottolog[11] は上記の 7 言語の内，4 言語（Kambera, Mamboru, Wanukaka, Anakalang）は相互に近い関係があるため中部・東部スンバ語という言語グループにまとめ，それ以外を Kodi-Gaura[12] グループと Wewewa-Laboya グループに分けている。このような言語による地域区分は，社会・文化的にも明らかに当てはまる。スンバ島の中部から東部にかけて社会組織と儀礼などの慣習は比較的に均質であるが，西スンバ県と南西スンバ県では，地域単位での違いが顕著で，多様性が明白である。とくに西端のコディには父系出自だけでなく母系出自（*walla*）も社会的に重要な意味をもっている [13]［Hoskins 1993: 15–18］。これはスンバ島ではコディ社会だけに認められる特徴的な親族制度である。

スンバ語ともっとも近い系統の言語は，サブ島とライジュア島で使われているサブ語（カンベラ語で *hilu haü*）であり，言語学上は Sumba-Hawu という言語グループを形成する［Blust 2008, Klamer 2009］。このようなスンバ語とサブ語の類縁性については研究者の意見は一致している。しかし，Sumba-Hawu グループより上位のレベルの言語グループについては，

いくつかの説がある［Fricke 2020］。議論の焦点となるのは，スンバワ島東部で使用されているビマ語とスンバ語との関係である[14]。オーストロネシア語族の言語分類において，1938年のオランダ人のエセル（Esser）の分類［Gasser 2014: 63–65］からビマ語とスンバ語の類縁性は当然視されていた。しかし，オーストロネシア語族について多くの研究の発表をしているブラストは「Bima-Sumba サブグループは存在するか」［Blust 2008］と題する論文で，このサブグループの存在を否定し，ビマ語をティモール島の諸言語を含むグループに位置付けた。一方，ガッサー（Gasser）はこれまでの言語分類と違って数量的手法で分析し，Bima-Savu-Sumba（BSS）の存在を主張した。なお，ガッサーはBSSとフローレス島の諸語（Flores）の上位グループとしてBima-Sumba-Flores（BSF）を提唱している［Gasser 2014; 74］。筆者は現時点ではガッサーの研究成果に従い，スンバ語とビマ語の類縁性を説得力のある仮説と認めたい。

3　オーストロネシア人の移動史

スンバ人がいつ，どこからスンバ島に渡来したかを考えるためには，前章で取り上げたスンバ語が属するオーストロネシア語族（Austronesian language family）の拡散と移動経路を明らかにすることが必要である。本稿ではおもに先史考古学者であるベルウッドの研究を基にしてこの課題に取り組む。このテーマに関連するベルウッドが書いた単著3冊［Bellwood 1997, 2017, 2022］を紐解けば，それぞれ本の焦点と刊行意図は異なっているとはいえ，20年以上の研究史においてオーストロネシア人の移動史に関する研究に画期的な変化が生じたことは明白である。毎年のように新しい発掘が東南アジアとオセアニア各地で進められ，考古学の研究成果が蓄積したこともあるが，端的に言えば古代DNA研究がオーストロネシア研究にパラダイム転換をもたらした。2006年に次世代シークエンサが実用化さ

れ，古人骨に残るDNA解析が可能になった結果，人類の起源と移動史の研究が飛躍的に発展した[15]［篠田 2022: i-v］。

ベルウッドが最新の分子人類学・言語学・考古学の研究成果を総合してまとめた著作［Bellwood 2017, 2022］は，言語学者が明らかにする東南アジア島嶼部とオセアニアに広がるオーストロネシア系言語の拡散と，人類学者が取り組む化石人骨とDNAの分析から解明される人類の移住，さらには考古学者が発掘した遺物の分析が全体として一つのモデルを形成し，オーストロネシア人の移動史を解き明かすという前提に基づいている。ベルウッドの考えでは，「遺伝子と，言語，文化」［Bellwood 2022: 269-270］，つまり「アジア人」［Bellwood 2017: 86］と，オーストロネシア系言語，農耕技術を有する新石器文化がほぼ一体となって台湾から東南アジア島嶼部に拡散し[16]，さらに西はアフリカのマダガスカル島，東は南太平洋のイースター島にまで広がったという壮大な人類史を描き出している[17]。ベルウッド自身，上記の3点セットがミクロなレベルでは食い違いを示すことを認めているが，それはあくまで例外的であると考えている［Bellwood 2022: 270］。ベルウッドが支持するこのような仮説は，もちろんすべての研究者が認めているわけではない。たとえば，より地域的なレベルで，クラメルはフローレス－ルンバタ地域（the Flores-Lembata region）のパプア系言語の研究に基づいてベルウッドのマクロ・レベルのモデルに対し批判的な見解を表している［Klamer 2019］。

スンバ人を含む東部インドネシアに現在住む人びとのルーツを考えるためには，オーストロネシア人の移動の前に，オーストラロ・パプア系（Australo-Papuan）[18]と呼ばれるホモ・サピエンスの拡散を取り上げる必要がある［Bellwood 2017: 86-87］。ゲノム解析によるとホモ・サピエンスは6万～5万年前にアフリカを出たと言われる[19]［篠田 2022: 111-112］。この集団はアジア大陸を東に進み，更新世に存在したスンダ大陸[20]を通り，

竹筏を使ってウォーレシア海域の島々（小スンダ列島などを含むインドネシア東部の島々）を渡って，遅くとも 45,000 年前頃にはニューギニア島とオーストラリア大陸（両者は氷河期にサフル大陸を形成していた）にまで到達したと考えられている［小野 2018: 65–75］。

続いて「出台湾仮説」（out of Taiwan hypothesis）とも呼ばれるオーストロネシア人の移動に関する説を紹介する。ベルウッドによれば，およそ 5,500 年前[21]に中国南部から台湾に渡った人びとが，東南アジア島嶼部からオセアニアにまで広まっているオーストロネシア語族の祖先である。この学説はもともと歴史言語学者によるオーストロネシア語族の研究から提唱された。ベルウッドの考えでは，オーストロネシア語族は新石器文化の広がりと重なる。プロト・オーストロネシア言語を話す人びと，いわゆるオーストロネシア人は 4,200 年前に台湾から北部フィリピンに渡り，さらに 3,300 年前までにはインドネシア東南部やスマトラ島，ジャワ島に広がったとされる［Bellwood 2017: 181–183］。オーストロネシア語族の原郷が台湾であることはほとんどの言語学者が認めているが，それに属する諸言語が東南アジア島嶼部にいつ，どのような経路で広がったかは明らかになっていない［Bellwood 2017: 201］。1 つの可能性として比較言語学の研究成果を示した図［Bellwood 2017: 205］では，インドネシア東部に広がっている中央マラヤポリネシア語群（CMP）は，フィリピンからハルマヘラ島を南下し，さらにモルッカ諸島を経て，ティモール島の北にある島々から西へフローレス島，スンバワ島東部にまで広がったという経路が示されている。

もともと歴史言語学の研究成果から明らかにされた「出台湾仮説」とオーストロネシア人の拡散は遺伝子レベルの分布とも密接に関係することが証明された[22]。コックス（M.P. Cox）を中心とする研究チームは，ジャワ島やバリ島などウォーレシア海域の西では住民はほぼ「アジア系（Asian

ancestry)」のDNAをもっているが，東南アジア島嶼部を東に進めば初期のホモ・サピエンスの拡散に由来する「パプア系（Papuan ancestry)」のDNAが次第に色濃く認められることを明らかにした（ニューギニア島沿岸部の住民はもっとも「アジア系」の比率が低い)。つまりオーストロネシア人（アジア系）が移動する過程で，ウォーレシア海域の島々において先住の「パプア系」の人びととの交雑（admixture）が進んだと考えられる［Cox 2017, Lansing & Cox 2019: 29–31］。コックスはこのような交雑が4,000年前から東部インドネシアの限られた地域で始まったと述べている［Cox 2017: 113］。

スンバ島を含む東部インドネシアの住民の調査結果から，母親から子へ母系で伝わるミトコンドリアDNAと父親から子へ父系で伝わるY染色体DNAを比べると，ミトコンドリアDNAはY染色体DNAよりも「アジア系」である割合がかなり高いことが明らかになる[23]［Lansing & Cox 2019: 37–38］。つまり，「アジア系」女性のほうがウォーレシア海域という「バリアを超えやすかった」ことになる［Lansing & Cox 2019: 30］。ランシングらの著書 *Islands of Order*［Lansing & Cox 2019］は，このような性的なバイアスができた理由を母方居住／母系制と結びつけ，レヴィ＝ストロースの「家社会論」も登場する壮大な議論を展開している。この問題を社会人類学の立場からどう解釈すべきかは，稿を改めて論じたいと思う。

スンバ島には現在，形質と言語の点で他の住民と明確に異なるパプア系の特徴を示す集団は存在しない。ただし，上述のようにスンバ島の住民には遺伝子レベルでパプア系の要素が明らかに認められる。また，出土した古人骨には明らかにアジア系とパプア系の双方の特徴が認められる（5章参照)。この問題は，もう一度後で取り上げる。

4　スンバ人の移動史

4-1　スンバ島における「言語と遺伝子の共進化」

冒頭で紹介したように，ランシングを中心とする研究チームが発表した論文［Lansing et al. 2007］は，多くのスンバ人が祖先の上陸地と信じている地域，つまりウンガの近くにある起源の地からスンバ人の祖先が島の東西各地に移動していったことを，遺伝子と言語の調査結果から明らかにしようとしている。この論文は「言語と遺伝子の共進化（Coevolution of Languages and Genes）」をタイトルとして，約 3,500 年前[24] にスンバ島に到達したオーストロネシア系の農耕民と先住民であり非オーストロネシア系の言語を話す狩猟採集民とのコンタクト・ゾーンにおける言語的かつ遺伝的な多様性を研究しようとしている［Lansing et al. 2007］。筆者は言語学と分子人類学の専門家でもないので，「言語と遺伝子の共進化」がデータの分析によって適切に証明されているかどうかを論じることはできない。しかし，この論文の前提になっているスンバ人の起源神話とウンガ周辺の生態環境についてはある程度把握しているので，その知識に基づいて，この論文の前提となっているスンバ人の祖先の上陸地については論じることができる。

次にこの論文の分析結果と議論の概要を紹介しよう。言語については，スンバ島各地の 29 の言語サンプル（200 語のスワデシュ・リスト）を対象にして分析を進め，その系統関係を明らかにした。遺伝子については，8 つの村で合計 352 人の男性からサンプルが採取された。DNA 解析の結果，父系で伝わる Y 染色体に関して 4 つのハプログループ（C と K，M，O）が確認された。そのなかで，オーストロネシア系と結びつく O 系統は全体の 16％しか確認されず，それ以外の 3 系統はパプア系と関連するハプログループである。地理的にみると，スンバ島を東から西に行くほど O 系統の

比率が低くなっている［Lansing et al. 2007: 16022–16024］。

この論文で提示されている仮説を簡潔に紹介する。ウンガの周辺に定着した後，オーストロネシア系であるスンバ人の祖先は島の中心部に向かって南に移動した。その前に最初の分裂が起きて，言語グループ A ができた（現在の西スンバ県の Loli など）。言語グループ B が島の南部から西部に広がった（現在の南西スンバ県の Kodi など）。もともとウンガ周辺にいた言語グループ C が島の中心部を占め（現在の中部スンバ県の Anakalang など），最後にウンガ周辺から島の東部に移動し，言語グループ D（東スンバ県の Lewa など）と E（東スンバ県の Rindi など）ができあがった。生態環境として東部と比べて西部は雨量が多く，人口密度も高い地域である。西部に移動した集団は非オーストロネシア系の言語を話す，数多くの先住民と接触した。その結果，西部の言語には非オーストロネシア系言語からの借入語が多く，また遺伝子的にもオーストロネシア系と結びつく O 系統の割合が低くなると述べている［Lansing et al. 2007: 16025］。

4–2　スンバ神話とハハル岬の位置付け

ランシングらの研究の出発点はウンガ周辺をスンバ人の祖先の上陸地とみなす神話である。論文［Lansing et al. 2007: 16025］で参照されているのは，コディで調査を実施した人類学者ホスキンズが書いた本［Hoskins 1993］である。ホスキンズは南西スンバ県のコディでの調査に基づき「すべての西スンバ人は自分たちの出自をササル岬に上陸した先祖からたどる。その例外は，Laura で Lombo，Balaghar で Karendi と呼ばれる先住民の 2 ～ 300 人の子孫たちである」［Hoskins 1993: 32］と述べている。さらに，口承伝承ではウンガのすぐ北に位置するハハル岬について “haharo malango”（ハハル岬）と “kataku lendu watu”（斧の形をした石橋[25]）という儀礼言語が使われ，はるか彼方の地からハハル岬に来たと語られてい

る［Hoskins 1993: 33］。このコディ語の儀礼言語はカンベラ語では Haharu Malai, Kataka Líndi Watu（ハハル岬，斧で壊された石橋）という，スンバ人の祖先の起源の地を示す語句になる。かつてハハル岬と対岸のフローレス島またはスンバワ島の間に石橋が架けられていたが，祖先たちの話し合いによって橋が雷で壊され，行き来ができなくなったという神話に由来する［Kapita 1976a: 12–13］。

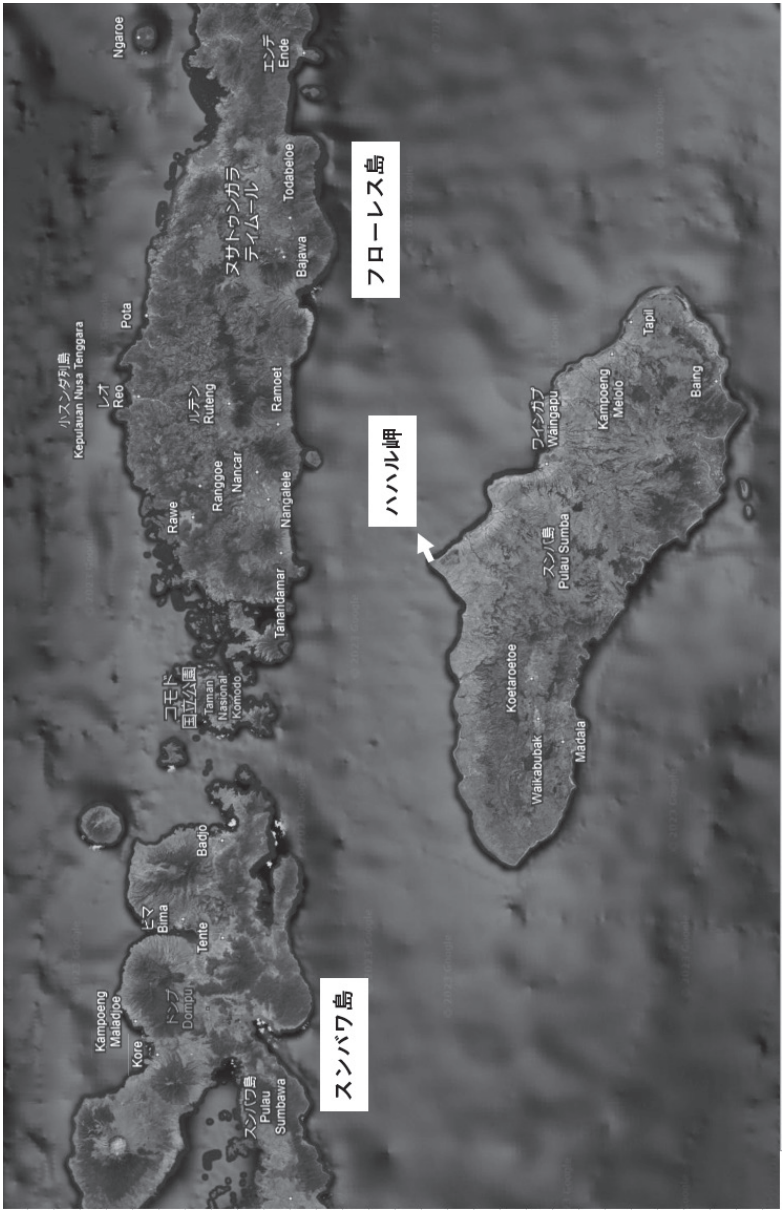
スンバ人の神話的世界においてハハル岬が特別な役割を果たしていることは確かである。しかし，スンバ人の間でハハル岬だけが祖先の上陸地点と考えられているか確認するために複数の地域の神話を比較すると，そうとは断定できないことがすぐに分かる。たとえば東スンバのマンギリ（Mangili）[26] の神話を調べてみよう。これはマンギリ出身でオランダ統治時代に宣教師オンフレーの下で助手として働いたカピタが書いたスンバ語（カンベラ語のマンギリ方言）のテキストである [27]［Kapita 1979: 7–246］。この神話はマンギリの支配的氏族であるマル（Màru）の祖先（*marapu*）の到来を語る。“*la Ruhuku la Mbali / la Enda la Ndau*”（バリ島，ロテ島とンダオ島 [28]）を経て，舟で“*la Kataka Lindi Watu / la Haharu Malia*”（斧で壊された石橋，ハハル岬）に到達した [29]。しかし，その後も祖先は北海岸を南東方向に航海を続け，カナタン，パンダ・ワイなどを経て，マンギリにたどり着いた［Kapita 1979: 7–13; Woha 2007: 27–31］。

上記のマンギリの神話では帆（*liru*）をかける舟（*tena*）に乗ってスンバ島に到達したことになっているが，私が調査したウンガの神話では，支配的氏族の祖先は天から最初にメッカ（Maka Tana Bàkulu）に降臨した後，天に戻り，次にハハル岬近くの土地に再び降りたと語られる。さらに東スンバのレワ（Lewa）の支配的氏族であるマトーラング（Matolangu）の神話でも同様に始祖のウンブ・フキ（Umbu Huki）は最初にマッカに降りた。一方，その仲間は舟でカナタンに到達し，後にウンブ・フキと合

流した。ウンブ・フキは広く豊かな土地を求めてスンバのいくつかの土地に天から降臨したと語られる［Kapita 1976b: 232-233］。メッカはスンバの神話で起源の地としてしばしば登場し，ウンガでもメッカから舟に乗って6つの地域を経てスンバ島に到達するというバージョン（合計8組の地名が登場）も語られる［小池 2005: 73-78］。同様の神話はカピタも紹介し，メッカではなく「マラッカ，白い土地（Malaka Tanabara）」からハハル岬までのルートが書かれている［Kapita 1976a: 12］。また，東スンバ県のリンディを調査したフォースは「8層の家」から始まる16組の地名が出てくる神話を報告している［Forth 1981: 91］。スンバ島に到達するまでのルートがどのように描かれているのかという問題は本稿の議論とは直接関係しないので，これ以上取り上げない。ただし，交易によって伝わったマッカやマラッカという地理的知識が神話に反映されていると解釈できる［cf. Hoskins 1993: 33-34, 56-57］。

いくつかの神話のバージョンを紹介した。前節で取り上げたようなウンガの周辺を起源の地とみなす神話伝承はあくまでホスキンズがコディで聞き取った神話であり，東スンバではもっと多様な到来ルートを語る神話が存在する。もともと神話だけを基にして，スンバ人の移動史の再構成を試みるのは危うい方法論であるし，ランシングらが参照した神話自体が多様な神話のなかの1つのバージョンに過ぎないのである。

この章の最後に，スンバの神話的世界のなかでHaharu Malai, Kataka Líndi Watu（ハハル岬，斧で壊された石橋）という儀礼言語で示されるハハル岬が特別な位置を占めている理由について少し推論も交えて考えてみたい。スンバ人の祖先がどこから来たかを考えると，可能性が高いのは当然もっとも距離が近いフローレス島である（直線距離でわずか約44km）[30]。ハハル岬はフローレス島からもっとも近く，サブ海を航海してきた人びとにとってランドマークとなる岬である。フローレス島からハ



地図２　スンバ島のハハル岬と近隣の島々（フローレス島とスンバワ島）[31]

ハル岬を目指して南下したというのはスンバ人の祖先の渡来ルートとしてもっとも妥当である。なお，歴史的にみてもフローレス島とスンバ島の関係は密接であった。19 世紀後半になってオランダによる植民地支配が本格化する以前は，スンバ島は一種の「弱肉強食」の状態であった。強い力を持った者が弱者の集落を襲い，住民を捕らえて奴隷にしたとカピタは書いている［Kapita 1976a: 28］。そのようなスンバ島の状況に島外から関与していたのがフローレス島から舟で渡ってきたエンデ人であった。エンデ人は自ら奴隷狩りを行ったり，またスンバ人の地域支配者の傭兵として地域間の争いに加わった。もちろんスンバ島とフローレス島の間では敵対的な関係だけでなく交易も盛んに実施されていたと考えられる。

「2-2　オーストロネシア語族のなかのスンバ語」で紹介したようなスンバワ島東部で話されているビマ語とスンバ語の類縁性を考慮すれば，スンバ人の祖先がスンバワ島からフローレス島の南岸沿いを東に進み，ナンガ・ベレ付近で南下してスンバ島に到達したという移動ルートを想定することもできる。もちろん，スンバ人の祖先がどこから来たかについては，現時点の研究成果では確かな結論を述べることはできない。つぎに初期のスンバ人が島内のどのような地域に住んでいたかをより具体的に検討することにしたい。

5　考古学の研究成果と中核村ウンガの歴史

5-1　スンバ島の先史考古学

前の章で紹介したランシングらの研究は分子人類学と言語学の分析結果にだけ依拠しスンバ人の移動を論じていて，近年研究が進んでいるスンバの発掘調査についてはまったく取り上げられていない。この章ではインドネシア人の考古学者による調査結果に基づいて，移住初期のスンバ人がどのような生態環境で生活し，いかなる生活を営んでいたか考察する。

これを明らかにすることで，ウンガを最初の村とみなすような誤解を解いていきたい。取り上げるのは，東スンバ県で発掘されたランバナプ（Lambanapu）遺跡とブル・バク（Mburu Mbaku）[32] 遺跡である。前者は先行して発掘が進められていて，成果（インドネシア語論文）が報告［Handini et al. 2018］されているが，後者はまとまった報告がまだ公表されていない［Handini et al. 2023］。

ランバナプは東スンバ県の県庁所在地ワインガプに隣接するカンベラ郡に属する町（kelurahan）である。遺跡は現在カンバニル川西岸の高台に位置するが，スンバ島の隆起と河口部で堆積が進んだことを考えると，かつてはカンバニル川河口近くの海岸に近い所に位置していたと考えられる。発掘は 1980 年代から始まったが，2016 年から本格的に調査が進められた。二次葬と考えられる人骨が出土し，その頭骨の特徴から「モンゴロイドとオーストラロメラネシド [33] の交雑（percampuran antara Mongolid dan Australomelanesid）」［Handini et al. 2018: 76］が認められると書かれている [34]。この遺跡の年代は 2,000 年前頃［Handini et al. 2018: 76］と推定されている。なお，さらに深い層にも遺跡があるので，今後，調査が進むとさらに古い年代の人骨と遺物が発見される可能性がある。

海岸に近かったというランバナプ遺跡の特徴からハンディニらの研究チームは，スンバの歴史を考える上できわめて重要な 2 点を指摘している［Handini et al. 2018: 76–79］。第 1 に，ランバナプで生活していたスンバ人の祖先は陸の幸だけでなく海の幸を入手しやすい生態環境で暮らしていたということである。このような地域で生活していたスンバ人が，その後内陸部に移動を開始したと推測している。第 2 に，副葬品として出土したビーズ（manik-manik）[35] や金属器（benda-benda logam）の存在は，海上交易によってこれらを入手したことを示している。小スンダ列島のなかでスンバ島は孤絶しているように思われるが，2,000 年前頃にすでに島外と

の交易ネットワークによって多くの品々を得ていたのである。

続いて取り上げる論文は，同じくハンディニを筆頭著者とするが，ランバナプ遺跡の発掘結果も含めて，現時点でのスンバ島内の研究成果を総括している［Handini et al. 2023］。そのため，“Wunga, Mborobakung, Kambaniru, Lambanapu, and Melolo”［Handini et al. 2023: 4］という東スンバ県の複数の地域を対象として論じている。最初に注意すべきはウンガという地名である。ウンガを2章で取り上げた中核村ウンガを指すと考えると，このような地名の並列は意味をなさない。「地理的な観点から，ブル・バクとウンガの遺跡はカダハン川の近くで居住に適した環境である（From a geographical perspective, the Mborobakung and Wunga sites are suitable for habitation with the nearby Kadahang river.）」［Handini et al. 2023: 7］も明らかに間違った記述である[36]。中核村ウンガは乾燥し，水の入手がとても困難な地域にある集落で，生態環境として初期のスンバ人が居住していたとは考えられない土地であり（この点では3,000～2,000年前でも現在と大差はないと想定される），ランバナプなど他の4つの地域とまったく違うことは明白である。ランシングらの論文を参照し，「彼ら［スンバ人の祖先］はウンガに定着し（settled in Wunga），その後，人口が増え，スンバ中の他の地域に広がった」［Handini et al. 2023: 4］と書いているが，これも詳細に検討すれば原文の表現とは少し違っている。ランシングらの論文では「ウンガ周辺に定着した後（after settling near Wunga）」［Lansing et al. 2007: 16025］と，より正確に幅の広い地域に言及しているのである。なお，ブル・バクは現在の行政単位としてはウンガ村（Desa Wunga）の東隣のカダハン村（Desa Kadahang）の一部であるが，筆者が調査した1980年代にカダハン村はウンガ村に属していた。また，ハンディニらの論文ではMborobakungだけでなくMborobaku［Handini et al. 2023: 10］とMborumbaku［Fig. 1.］という表記も認められ，残念ながら統一されてい

ない。なお，現地の発音ではブル・バク（Mburu Mbaku）が正しいと言える。なお，ウンガとブル・バクの歴史的な関係については，後でまた取り上げることにする。

この論文はスンバの発掘調査の結果を総括している。遺跡の年代測定については，較正年代（Calibrated Age）でムロロ遺跡（人骨）が 3141－2782 年前，ランバナプ遺跡（有機土）が 2700－2352 年前と 2745－2485 年前という結果が掲載されている。現時点ではムロロ遺跡がスンバ島で最古ということになる。この最新の論文ではブル・バク遺跡の発掘結果については何も書かれていない。年代についてはムロロとブル・バク遺跡のもっとも深い層のサンプルがアメリカで分析中と書かれている［Handini et al. 2023: 5, 10］。

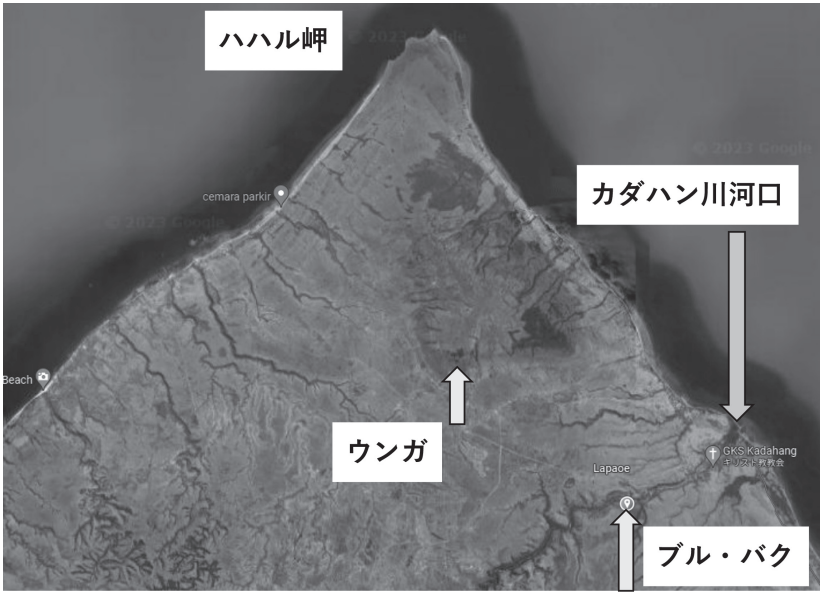
この論文でまとめられている結論［Handini et al. 2023: 10-11］は，最初に取り上げた論文と同じであり，ランバナプのように河口近くなど海岸部に位置していた集落が食料獲得の点だけでなく，島内および島外との交易に関して適しているという結論には全面的に同意する。問題は下記のような記述である。「ウンガ遺跡とブル・バク遺跡はスンバの伝承に基づけば古いスンバの中核村であり，たぶんもっとも古い集落に含まれる（The Wunga and Mborobakung sites, based on Sumbanese folklore, are old Sumba ancestral villages, perhaps including the oldest dwellings.）」［Handini et al. 2023: 10-11］という一文は，ウンガの地理上の位置だけでなく，つぎに検討するウンガで語られる伝承と照らし合わせても明らかに問題を含んでいる。

5-2　ウンガの由来に関する口頭伝承

筆者が調査で聞いた口頭伝承では中核村ウンガは自分たちの祖先が最初に建てた村ではなく，それ以前にレイ・バヤ（Lai Mbaya）とブル・バクと

いう村があったと語られている[37]。さらに教育文化研究技術省（KEMDIK-BUD）のバリ州・西ヌサ・トゥンガラ州・東ヌサ・トゥンガラ州文化価値保護局のサイトに掲載されている「ウンガ村, スンバ社会誕生の地（Kampung Wunga Tanah Kelahiran Masyarakat Sumba)[38] という伝承によると，スンバ人の祖先がハハル岬に到達した後，カダハン川河口近くに居住し，さらに，一時的にレイ・バヤに住んだ後，ブル・バクに村を作り，その後，プレイ・ンギル（Prai Ngilu), ラトゥ・バラ（Ratu Bara), ルク・カタビ（Luku Katabi）を経て，マタワイ・ウンガ（Matawai Wunga）という村を作った。*wunga* という名前の木(学名は *Sesbania grandiflora*, 和名はシロゴチョウ)[39] がある泉（*matawai*）の近くという由来が書かれている。このマタワイ・ウンガが中核村ウンガ（Parai Wunga）になったという。これとまったく同じ集落の移動ルートは，東スンバ県レワ郡のティダス（Tidas）に関する伝承(Sejarah Lewa Tidas)[40] でも記録されている。

このような移住ルートが史実という保証はなく，あくまで１つの伝承にすぎない。とはいえ，ルートの最初の部分は一定の合理性をもつ記述だと考えられる。レイ・バヤはカダハン川河口とブル・バクの間にある地名である。以前は耕作することが禁忌とされた土地であったが，今は畑になっている。舟で渡来した人々が河口からレイ・バヤに移り，さらにすこし上流のブル・バクに村を作ったというのは，スンバ人の移動史として十分にありうることである。いずれにしても，初期のスンバ人が生活の場として選んだ地域がブル・バクやランバナプ，ムロロのように河口部や川の近くの地域だというのは，ハンディニらの２つの論文［Handini et al. 2018, 2023］が主張するように，先史考古学的に観ても妥当であろう。水を得ることが困難で生活環境としては厳しい，ウンガのような山の中腹とか丘の上に位置する中核村（*paraingu*）は，スンバ史のある時期になって出現し，オランダ植民地時代初期まで続いた村落形態であると考えるほうが妥当である。



地図 3　ブル・バクとウンガ [41)]

6　おわりに

先史考古学者ベルウッドによれば，スンバ人の祖先であるオーストロネシア語族集団は，農耕技術を有する新石器文化を携えて，アウトリガー・カヌーを使って，約 4,200 年前に台湾からフィリピンに渡り，さらに東南アジア島嶼部に拡散し，最終的にスンバ島に到達した。オーストロネシア人拡散の約 4 万年前には，別のゲノムをもったホモ・サピエンスがすでにインドネシア東部には広まっていて，到来したオーストロネシア人との間に交雑が進んだと考えられる。この点はランシングらの研究によって，かなり明らかにされている。

サブ海を航海してきたスンバ人の祖先にとってハハル岬はランドマークとなる岬であった。この岬がスンバ人の渡来を伝える神話伝承に Haharu

Malai, Kataka Líndi Watu（ハハル岬，斧で壊された石橋）という儀礼言語で登場するのは自然である。しかし，周辺の地形を考えれば，ハハル岬に上陸しそこに定住するというのはありえないことである。やはり海岸沿いをすこし東南に移動しカダハン川河口に上陸するというのが妥当なルートであろう。河口に上陸したスンバ人の祖先（オーストロネシア語族のプロト・スンバ語を話す集団）がランシングらが主張するようにスンバ島各地に広がったのか，それとも，渡来した集団の一部がさらに海岸部を東に進み，カンバニル川河口（現在のワインガプ周辺）やムロロなど複数の地域に上陸したのかはまだ明らかになっていない。ムロロ遺跡の年代測定上の古さと口頭伝承の多様性から考えると，ランシングらの論文で描かれている「ウンガ周辺」を起点とするスンバ人の移住史は再考する必要がある。さらに，初期のスンバ人は農耕技術をもって渡来して来た以上，伝承に描かれているカダハン川河口から，すこし上流のブル・バクに移って集落を作ったという移住ルートは，海産物に頼るだけでなく，より良い耕作地を求めるという生存戦略から合理的な行動と言える。ブル・バク遺跡の発掘調査結果と年代測定はまだ公表されていないが，ウンガという自然環境的に集落にふさわしくない地域に中核村を建てる以前に，カダハン川河口に上陸したスンバ人は数世代かに渡ってブル・バクで生活を営んでいたと考えられる。ウンガを「最初の村（Kampung Pertama）」とみなすのは明らかに間違いである。ただし，このような先史考古学の研究成果とはまったく別に，現在のスンバ社会全体でウンガを最初の村とみなす「現代的な神話」が広がっていることは確かである。

本稿の最後に，スンバ史における集落の変遷を考えてみたい。これは筆者なりの仮説であり，変遷の時期を具体的なデータに基づいて確定するのは困難である。スンバ島に渡来した初期の段階において，ハンディニらの先史考古学的研究からも明らかなように，河口近くの集落は，比較的に生

活環境として適し，さらに舟を使った島内だけでなく島外との交易にも有利だったと考えられる。ジャワ島やバリ島と違う，乾燥したサバナ気候において，スンバ人の初期の集落が，ブル・バクやカンバニル，ランバナプ，ムロロなどに立地していたことは妥当である。第二段階として，歴史的にいつとは断定できないが，スンバ人の人口が増え，農耕地などをめぐる村落間の争いが勃発するようになると，河口近くや川沿いのアクセスしやすい地域に地域社会の拠点を置くのは，攻撃を受けやすく危険になってきた。上記のような開かれた地域にある集落から内陸部にある丘の上の砦化した集落（fortified settlement）[42] が政治的な領域（domain）の中心的役割を果たすようになった。これが中核村（*paraingu*）と呼ばれる集落である。もちろん防御的な役割だけでなく，祭祀上の中心でもあり，儀礼が執行される慣習家屋が建ち並ぶ集村である。ブル・バクのようなカダハン川沿いの集落にとって中心的な存在が中核村ウンガであり［小池 2005］，また海岸部にムロロが位置していたウマルル（tana Umalulu）には，内陸の丘の上に中核村ウマルル（Parai Umalulu）［Kapita 1976b: 79–174］が威容を誇っていた。なお，地域支配者間の争いとエンデ人による奴隷狩りはおもに 19 世紀以降のオランダ人の植民地文書に書き記されている［Roo van Alderwerelt 1906］。このような戦争状態は，オランダによる植民地支配がスンバ島に定着していく過程で次第に治まっていき，20 世紀初頭のオランダ勢力による「平定化」によって完全に終息した。それ以降，東スンバ県では中核村が放棄され，主要道路や耕地近くの集落がおもな生活の拠点となっていった［小池 2005: 48–51］。なお，東部とは異なりスンバ島西部では丘の上などに立地する集村が今でも残っている地域が多い。

約 3,000 年におよぶスンバ人の歴史を考える上で，現在，伝統的とされる中核村を昔から存在したと考えるのではなく，それ以前に確実に存在した集落形態を考えて議論を進めることが重要である。

註

1）調査成果に基づき博士論文をまとめ，さらに『東インドネシアの家社会――スンバの親族と儀礼』［小池 2005］として刊行した。

2）ランシングらの研究チームが公刊した研究成果，とくに *Islands of Order*［Lansing and Cox 2019］は，数理モデルを使った難解な内容の研究書であった。2021 年 9 月 3 日に「Islands of Order を読む―ゲノムと数理モデルで解明する小スンダ列島の社会」研究会（於京都大学）に参加し，「社会人類学のスンバ研究者としての立場から *Islands of Order* を読む」と題する研究報告をする機会が与えられた。これはランシングらの研究成果を理解する上でとても貴重な機会であった。あらためて主催者の古澤拓郎教授（京都大学）に感謝の意を表したい。

3）https://www.google.co.jp/maps/@-9.1504337,119.446822,8z?entry=ttu（最終確認 2023/11/29）

4）マンボロなど地域によってはｈがｓになり，Sumba と発音される［Onvlee 1984: 101］。

5）スンバ人自身にとって慣習（インドネシア語で adat，東スンバ県のカンベラ語で *húri*）の地域差（詳細にみれば村単位で異なる）は社会的に重要である。なお，本稿ではとくに断らない限りは以後オンフレー［Onvlee 1984］とカピタ［Kapita 1982］の辞書に掲載されているカンベラ語で表記する。

6）サブ島はスンバ島とロテ島（ティモール島の西にある）のほぼ中間に位置し，その西に位置するライジュア島にもサブ人が居住する。サブ島はサブ語では Rai Hawu［Duggan & Hägerdal 2018: 535］，インドネシア語では Pulau Sabu, 英語では Island of Savu と表記される。言語学関係の文献とサイト（たとえば Glottolog）では Hawu と表記される。

7）エンデ人はスンバ島の北に位置するフローレス島中部にある港町エンデの出身者である。東ヌサ・トゥンガラ州の住民の中では珍しくムスリムが多数派である。スンバ島にオランダ統治が確立する以前は，奴隷狩りを目的としてスンバ島に襲来した。

8）ワインガプの海岸部にはブギス集落（Kampung Bugis）と呼ばれる一画がオランダ植民地時代から存在する。

9) 具体的に言えば現在の東スンバ県カンベラ郡とそれに隣接する地域である。なお，domain はリンディを調査した人類学者フォース［Forth 1981］が使い始めた用語で，インドネシア独立前の文化的・政治的にまとまった領域を指す。

10）クラメルの著書 *A Grammar of Kambera* の地図［Klamer 1998: 2］で示されているカンベラという地域は東スンバ県のほぼ東部を指し，オンフレーの地図に描かれているカンベラ［Onvlee 1984: XVI］よりもかなり広い領域を含んでいる。いずれにせよ，どの程度の範囲で使用されている言語をカンベラ語として認めるかという問題は研究者によって違いが大きい。

11）Glottolog 4.8 は世界中の多様な言語が網羅されている貴重な言語学の専門的サイトである。https://glottolog.org/（最終確認 2023/11/29）

12）Gaura は西スンバ県西ランボヤ郡で使用されている言語［Lovestrand 2021: 43］。

13）社会人類学では父系出自と母系出自が共存する体系を二重出自（double descent）と呼ぶ。コディと同様の二重出自はサブ社会でも認められる。ただし世界的にみたら，あまり存在しない出自である。

14）筆者は言語学の専門家ではないので，近隣の言語とスンバ語との関係について各研究者の根拠の妥当性を十分に論じることはできない。

15) 最新の DNA 研究はもちろん日本人の起源に関する学説も大きく変えた［篠田 2019，斎藤編著 2020］。また，従来の人類進化の教科書的知識も塗り替えられ，ホモ・サピエンスの初期拡散の過程でネアンデルタール人との交雑があったことが明らかにされた［篠田 2022: 33］。

16）分子人類学者の篠田も「2009 年には，東南アジアから北東アジアにかけての現代人集団のゲノムデータが解析され，アジアの集団の遺伝的分化は基本的に言語集団に対応していることが示されています」［篠田 2022: 174］と述べている。

17）オーストロネシア人は腕木を装着したアウトリガー・カヌーを使って島々に渡っていったと考えられる［小野 2018: 119］。

18)「オーストラロ･メラネシア系」とも呼ばれる［小野 2018: 71］。現在のオーストラリア先住民（Aborigines）とニューギニア島のパプア人に加えて，ア

ンダマン島民やフィリピンのネグリートの祖先である［Bellwood 2017: 86–87］。

19）出アフリカの年代については未確定である。考古学者の小野は「大まかに10～7万年前頃のどこかとするのが一般的」と書いている［小野 2018: 46］。

20）スンダ大陸はマレー半島と，スマトラ島，ボルネオ島，ジャワ島などを含む。

21）ベルウッド［Bellwood 2017: 181–183］は紀元前（BCE）で表記しているが，他の記述とそろえるために現在を起点とした表記（BP）に直している。

22）形質人類学者の松村博文は，東南アジア島嶼部で発掘された頭骨と歯を対象とした分析の結果から，分子人類学者による遺伝子レベルの分析結果と同様の結論を導き出している［Matsumura et al. 2017; 松村 2019］。

23）篠田は，現代のポリネシア人のDNAについて，同様の調査結果を紹介している。ただし，この分析結果について「現代人のゲノム解析からだけではうまく説明ができません」［篠田 2022: 184］と述べている。

24）この年代が先史考古学の研究成果から考えて妥当かどうか，確かなことは分からない。

25）“the adze-shaped stone bridge”［Hoskins 1993: 33］という英訳の邦訳であるが，石橋に関する神話を考えると，拙訳「斧で壊された石橋」のほうが適切だと考えている。

26）現在の行政単位としては東スンバ県パフンガ・ロドゥ郡に当たる。

27）ウォハ（Woha）がカピタのスンバ語のテキストをインドネシア語で要約したテキスト［Woha 2007］を参考にしている。

28）ロテ島はティモール島の西に位置する島で，ンダオ島はロテ島の西にある小島である。

29）マンギリの神話ではスンバに到達する前の地名として「バリ島，ロテ島とンダオ島」しか登場しないが，60ページに紹介するように，スンバでは8組の地名が語られる神話が多い。

30）Google Earthでハハル岬と，そのほぼ真北に位置する西マンガライ県のナンガ・ベレ（Nanga Bere）との距離を測定した。

31）Google Earthを基にして筆者が作成。
https://earth.google.com/web/@-9.09990195,119.3083391,-5.36372142a,595087.

27996588d,35y,0h,0t,0r（最終確認 2023/11/29）

32）スンバ語の音韻体系では mb と b は区別されているが，本稿では語頭の mb の音をカタカナのバ行で表記することにする。

33）このような古人骨の形質から明らかになった分析結果は 3 章で論じた DNA が示す「アジア系」と「オーストラロ・パプア系」の交雑と同じことを示している。

34）ベルウッドはオランダ統治時代に発掘されたムロロ遺跡の人骨からもアジア系とオーストラロ・パプア系の交雑を示す特徴が認められると書いている［Bellwood 2017: 96］。

35）2023 年の論文では monochrome glass beads［Handini et al. 2023: 9］と書かれている。弥生時代の遺跡で出土するガラス玉について「このガラス玉のほとんどは中空のガラス管を切断する方法で加工されたモノトーンの小さな玉で，分布状況から『インド・パシフィックビーズ』と呼称されています。」という記述があり，同じ種類のガラス玉の可能性がある。https://glass-poster.iyog2022.jp/art/art2/art2-03-magatama/（最終確認 2023/11/29）

36）地図（Fig 1）には中核村ウンガの位置が示されている［Handini et al. 2023: 6］。そうであるのに，なぜウンガの生態環境とブル・バクを同一視できるのか大きな疑問である。

37）レイ・バヤからブル・バクに移り，さらに別の村を経て，現在の中核村ウンガが建てられたと語られるが，その詳細なルートについては筆者のインフォーマントからは十分な聞き取りができなかった。

38）https://kebudayaan.kemdikbud.go.id/bpnbbali/kampung-wunga-tanah-kelahiran-masyarakat-sumba/（最終確認 2023/09/24）

39）Wunga という名前については，植物名ではなく「最初の，始まりの」という意味だとウンガでの調査中に聞いていた。

40）https://warisanbudaya.kemdikbud.go.id/?newdetail&detailCatat=3122（最終確認 2023/11/28）

41）Google Map を基にして筆者が作成。
https://www.google.co.jp/maps/place/Mborobaku+Site/@-9.3554836,119.8837651,21457m/data=!3m1!1e3!4m6!3m5!1s0x2c4b5b66fb2ac5eb:0x

92966a321ef1dc0c!8m2!3d-9.41798!4d119.9943833!16s%2Fg%2F11tj6x73fh?hl=ja&entry=ttu（最終確認 2023/11/29）

42）ウォーレシア海域の島々にある砦化した集落については，O'Connor, S., A. McWilliam and S. Brockwell（eds.）［2020］が詳細に論じている。

参考文献

小池誠，2005，『東インドネシアの家社会――スンバの親族と儀礼』晃洋書房 。

小池誠，2020，「映画とインスタグラムが誘うスンバ――インドネシア東部における観光の発展」『桃山学院大学総合研究所紀要』46-2：61-80。

松村博文，2019，「基盤研究 A 東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史，日本学術振興会科学研究費による基盤研究（A）　2011～2015年度」https://web.sapmed.ac.jp/anthropology/research/p899u400000000k3.html（最終確認 2023/11/18）

小野林太郎，2018，『【増補改訂版】海の人類史――東南アジア・オセアニアの海域の考古学』雄山閣。

斎藤成也編著，2020，『最新の DNA 研究が解き明かす。日本人の誕生』秀和システム。

篠田謙一，2019，『新版　日本人になった祖先たち――DNA が解明する多元的構造』NHK 出版。

篠田謙一，2022，『人類の起源』中公新書。

anon., 2016, Kisah Warga Sumba, Kupang, NTT, https://brandalmetropolitan.blogspot.com/2016/08/kisah-warga-sumba-nusa-teggara-timur.html（最終確認 2023/10/07）

Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur, 2023, *Provinsi Nusa Tenggara Timur dalam Angka 2023*, Kupang: Badan Pusat Statistik Provinsi Nusa Tenggara Timur.

Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur, 2023, *Sumba Timur dalam Angka 2023*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Timur.

Bellwood, P., 1997, *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*, (Revised ed.), Honolulu: University of Hawai'i Press.

Bellwood, P., 2017, *First Islanders: Prehistory and Human Migration in Island Southeast Asia*, Hoboken: Wiley-Blackwell.

Bellwood, P., 2022, *The Five Million Year Odyssey: The Human Journey from Ape to Agriculture*, Princeton: Princeton University Press.

Blust, R., 2008, Is There a Bima-Sumba Subgroup?, *Oceanic Linguistics*, 47-1: 45-113.

Cox, M., 2017, The Genetic History of Human Populations in Island Southeast Asia during the Late Pleistocene and Holocene, in Bellwood, P., 2017, *First Islanders: Prehistory and Human Migration in Island Southeast Asia*, Hoboken: Wiley-Blackwell.

Duggan, G. & H. Hägerdal, 2018, *Savu: History and Oral Tradition on an Island of Indonesia*, Singapore: NUS Press.

Forth, G.L., 1981, *Rindi: An Ethnographic Study of a Traditional Domain in Eastern Sumba*, The Hague: Martinus Nijhoff.

Fricke, H., 2020, More Subgrouping Evidence for Bima-Lembata (Austronesian, Eastern Indonesia). Presented at the 12th International Austronesian and Papuan Languages and Linguistics Conference (APLL12), University of Oslo (online).
https://www.hf.uio.no/iln/forskning/aktuelt/arrangementer/konferanser/2020/APLL12/program/fricke.pdf（最終確認 2021/06/24）

Gasser, E., 2014, Subgrouping in Nusa Tenggara: The Case of Bima-Sumba, in Connor-Linton, J. and L.W. Amoroso (eds.), *Measured Language: Quantitative Studies of Acquisition, Assessment, and Variation*, Washington, DC: Georgetown University Press.

Handini, R. et al., 2018, Situs Lambanapu: Diaspora Austronesia di Sumba Timur (Lambanapu Site: Diaspora Austronesia In East Sumba), *AMERTA: Jurnal Penelitian dan Pengembangan Arkeologi* 36-2: 67-80.

Handini, R. et al., 2023, New Evidence on the Early Human Occupation in Sumba Islands, *L'Anthropologie* 127: 1-13.

Hoskins, J., 1993, *The Play of Time: Kodi Perspectives on Calendars, History,*

and Exchange, Berkeley: University of California Press.

Kapita, Oe.H., 1976a, *Masyarakat Sumba dan Adat Istiadatnya*, Waingapu: Panitia Penerbit Naskah-naskah Kebudayaan Daerah Sumba Dewan Penata Layanan Gereja Kristen Sumba.

Kapita, Oe.H., 1976b, *Sumba di dalam Jangkauan Jaman*, Waingapu: Panitia Penerbit Naskah-naskah Kebudayaan Daerah Sumba Dewan Penata Layanan Gereja Kristen Sumba.

Kapita, U.H., 1979, *Lii Ndai: Rukuda da Kabihu Dangu la Pahunga Lodu*, Waingapu: Panitia Penerbit Naskah-naskah Kebudayaan Daerah Sumba Dewan Penata Layanan Gereja Kristen Sumba.

Kapita, Oe.H., 1982, *Kamus Sumba/Kambera–Indonesia*, Waingapu: Panitia Penerbit Naskah-naskah Kebudayaan Daerah Sumba Dewan Penata Layanan Gereja Kristen Sumba.

Klamer, M., 1998, *A Grammar of Kambera*, Berlin: Mouton de Gruyter.

Klamer, M., 2009, The Use of Language Data in Comparative Research: A Note on Blust (2008) and Onvlee (1984), *Oceanic Linguistics* 48: 250–263.

Klamer, M., 2019, The Dispersal of Austronesian Languages in Island South East Asia: Current Findings and Debates, *Language and Linguistics Compass*. https://doi.org/10.1111/lnc3.12325

Lansing, S. et al., 2007, Coevolution of Languages and Genes on the Island of Sumba, Eastern Indonesia, *PNAS* 104–41: 16022–16026.

Lansing, J.S. & M.P. Cox, 2019, *Islands of Order: A Guide to Complexity Modeling for the Social Sciences*, Princeton: Princeton University Press.

Lovestrand, J., 2021, Languages of Sumba: State of the Field, *NUSA* 70: 39–60. https://doi.org/10.15026/100089

Matsumura, H. et al., 2017, The Biological History of Southeast Asian Populations from Late Pleistocene and Holocene Cemetery Data, in Bellwood, P., *First Islanders: Prehistory and Human Migration in Island Southeast Asia*, Hoboken: Wiley-Blackwell.

O'Connor, S., A. McWilliam and S. Brockwell (eds.), 2020, *Forts and Fortifi-*

cation in Wallacea: Archaeological and Ethnohistoric Investigations, Acton: ANU Press.

Onvlee, L., 1984, *Kamberaas*（*Oost-Soembaas*）*-Nederlands Woordenboek*, Dordrecht: Foris Publications Holland.

Roo van Alderwerelt, J. de, 1906, Historische aanteekeningen over Soemba, *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land-en Volkenkunde* 48: 185–316.

Woha, Umbu Pura, 2007, *Sejarah, Musyawarah & Adat Istiadat Sumba Timur*, n.p.: Cipta Sarana Jaya.

Introduction to the Ethnohistory of Sumba, Eastern Indonesia: Oral Traditions and Anthropological Findings

KOIKE Makoto

This paper aims to elucidate the ethnohistory of Sumba, Eastern Indonesia. I focus on two questions: where the ancestors of the Sumbanese landed and how they spread over the island. Wunga in East Sumba, where I conducted anthropological research in the 1980s, has been known to be the first village on Sumba based on the paper titled "Coevolution of Languages and Genes on the Island of Sumba, Eastern Indonesia," written by Lansing et al. [2007]. Their study shows a striking correlation between the percentage of Proto-Austronesian cognates and geographic distance from the area nearby Wunga. In addition, the study finds another positive correlation between the percentage of Y-chromosome lineages that derive from Austronesian (as opposed to indigenous Papuan) ancestors and the retention of Proto-Austronesian cognates. The research started based on oral history suggesting that the ancestors of the Sumbanese originally arrived near the village of Wunga. However, my investigation of various versions of the Sumbanese origin myths indicates that this area is actually one of several landing sites, such as the mouths of the Kadahang and Kambaniru rivers. Besides studies of molecular anthropology and historical linguistics, it is important to consider archaeological findings to determine Sumbanese ethnohistory. The articles written by Handini et al. [2018, 2023] show that the Lambanapu and Melolo sites in the coastal areas of northeastern Sumba were likely to be early settlements established by the Sumbanese before they spread to other areas of Sumba. These sites not only had good food

sources available but were also strategic for establishing relationships with other communities inside and outside the island. The archaeological findings in these sites include early metal artifacts, proving that the Neolithic culture was continuous with the Early Metal culture. My tentative argument for the changing settlement patterns on Sumba is that the early Sumbanese settled near estuaries and along rivers, which were suitable for food production and trade. As the population increased, conflicts among the villages became fierce and raiders from Ende, the island of Flores, often attacked coastal villages, local rulers built fortified settlements on hilltops and other inaccessible areas. These settlements, which were called *paraingu* in East Sumba, became political and ceremonial centers of each domain. Wunga is one such fortified village; therefore, it is not the first village to be established by the Sumbanese.